

取り残された民衆 元関東軍兵士と開拓団家族の証言  
(NHK ハイビジョン 2006 8-9)

阿部哲夫

満州に取り残された日本人開拓団の運命を、元開拓団、下士官、兵隊などの証言などをもとに証言。

番組の終わりに、草地作戦参謀の“置き去りは、日本軍の転進作戦のためであった”と言う証言が紹介されていた。

当時の日本の責任者の話としては、何とも無責任、卑怯、厚顔無恥。むしろ滑稽な感じ。最近の日本の指導者と言われる人々の言動と同じ感じ。

彼のあんなエクスキューズを聞くくらいなら、あの時はあの選択肢しかなかった、申し訳なかった、と率直に謝って貰った方が得心がいく、と痛烈に批判していた引揚者の老女が居た。彼女は、引き揚げてくる途中で乳飲み子を死なしてしまった。彼女は、我が子を亡くし、また同じような運命に曝されていた他の人々に何もしてやれなかった罪滅ぼしのために、現在残留孤児達の救済活動をしているそうである。

日本の民衆は、結局戦況についてつんぼさじきに置かれ、置いてきぼりを食らった。日本の指導層は、国体の維持とか作戦とか、もっともらしいことを理由にフリーハンドを維持しながら、実は自らの保身にはしていた。

こうした日本の実態は、今でも至る所で同じではないか。最近“国民に愛国心を持たせよう”と言った与党、政府、財界などの指導者達の発言を聞くと、“先ず貴方達から行いを変えなさいよ”と言いたくなる。

ウスリー川(黒竜江)沿いの虎頭日本守備隊では、1945年の春先からソ連側の兵力増強の変化に気づいていた。その旨を関東軍の本部に逐一報告、ソ連の満州侵攻の可能性を連絡していた。

8月9日未明からソ連は、一斉にソ満国境を越境、首都新京を目指して攻撃してきた。当時下士官だった証言者の一人は、何とはなしに自分達の居る満州は大丈夫だと思っていたとのこと。大抵の日本民衆も同じように感じていた。

ところが憲兵隊には、内密に軍幹部の即時撤退の連絡があったらしい。事実8月9日7時頃彼等が、新京の軍幹部住宅をチェックした際には、そこはもぬけの殻、家の中は急な避難を示すように乱雑を極めていたとのこと。

彼の証言によると、生田憲兵少佐からは、“これからは武器ではなしに、カネで戦え”と訓示されたとのこと。言われたときには、訓示の意味が分からなかったが、すぐ分かった。列車が新京を出るとすぐ、暴徒達が線路を占拠して走れない。彼等を武力で排除するよりもカネで排除する方が実際的と感じた。改めて憲兵の上層部にいる連中は頭がよいと思った。渡されたカネは、100円札でトランク8個だった。

虎頭守備隊の隣、虎林にあった清和開拓団(当時中2だった大塚さんの板開拓団)は早速避難を開始した。しかしこの開拓団では、通常の子供は南方補充のために出征してしまい、二人しか居なかった。それも一人は足が不自由、もう一人は虚弱者だった。結局この開拓団で無事に帰国できたのは大塚さんのみ。開拓団の中には、避難する途中にお産をした人もいたし、乳飲み子を置き去りにせざるを得ない人々もいた。

そうした人の中には、所謂満人(中国人)に助けられた人もいた。こうした状況下で、日本人を助けてくれた中国人がいたことは、日本人としては考えられない(特に満人を虐待した日本人のいたことを考えると)、と言う証言者が居た。

当時開拓団 25 万人のうち、健康な壮丁は根こそぎ兵隊として動員され、南方に送られていた。がら空きの満州をソ連に隠すために、日本側は、盛んに陽動通信なるものを使っていた。

憲兵隊、関東軍のトップの多くは、一方では満州を死守すべしとの命令を出しておきながら、日本の敗色濃厚になった 1945 年 7 月には帰国してしまった。

8 月 17 日ソ連との停戦交渉に飛来した日本軍の高級将校などは、日本軍には戦争続行を言いながら原隊に戻らず、見送りの日本兵達の前で飛行機に乗り、日本目指して逃げ帰ってしまった。

女性軍属の中には、自殺ように渡された手榴弾を“兵隊さん使って”と兵隊に渡し、自分達は青酸カリで服毒自殺した人々もいた。手榴弾の方が楽に自殺できたのである。

東安駅の悲劇: 関東軍から、ソ連の追撃を遅らせるために、東安駅を最後に出発する汽車が出た後、直ちに駅構内を爆破すべし、との命令があったが、当時の緊迫した混乱のために誤作動を起こし、車輜が人を乗せたまま爆破され、多くの死者を出した事件。

以上